
いい秘封の日と聞いて

VETTEL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いい秘封の日と聞いて

【Nコード】

N4706Y

【作者名】

VEETTEL

【あらすじ】

もしも大切な人がいなくなったとしたら・・・

気がついたら彼女は傍に居た。いつもいっしょに居てくれた。でも突然居なくなってしまった。私に何も言わずに、何も残さずに、ぷつりと消えてしまった。今まで一緒にすごした記憶さえも消えかかってしまっている。今残っているのは彼女の容姿と名前だけ。秘封倶楽部として一緒に過ごした時でさえも消えかかっている。消えてはならない大切な記憶なのに：私の記憶から消え去っていく。周りの人達は既に最初から居なかったように彼女が存在していたことを否定する。それが私は耐えられなかった。私は彼女を追い求めるかのように、直感でとある神社に辿り着いた。どうやってここに来たかは覚えていない。本能がここに何かがあると示したのだ。神社の拝殿へと向かった、そこに何かがあると信じて。

いつの間にか彼女は傍に居た。いつも行動を共にした。だが気がついたら彼女はそこに居なかった。私だけが存在してるこの世界。私の知ってるものは一切無く、周りは知らないものばかり。私が知ってるものといえば彼女と過ごした日々の記憶のみ。その記憶を糧に私はただひたすら歩く。行く先も分からずに、どの方角へ向かってるのかすらも分からず、ゾンビのように歩いた。歩き続け、彷徨い続け、行き着いた所には古ぼけた神社がぼつんと佇んでいた。周りには木々しかなく、人間はおろか動物の気配すらも無い。ただ、その神社には大きな境界があった。今まで見たこともない大きさの、人を丸々飲み込んでしまうほどの大きさだ。私はその境界の先に何か大切なものがあると直感で感じた。そして直感を信じてその境界へ飛び込んだ。

拝殿に向かっていたはずだ。ここはどこだ？ 周りは何処も彼処も眼ばかり。時々自分が住んでいた世界のモノ、例えば道路標識な

んかが漂っていた。ふと前方を見渡すと遠くに人影のようなものが見えた。一体誰なのだろうと思ひ小走り気味にその人影へ向かった。だいぶはつきり見えてきた。なんだか見覚えのある姿だ。もう少し近づいたところで私は確信した。

「え…嘘…」

境界に飛び込んだはいが何処へ行けばいいのだろう。周りは眼ばかりで気味が悪い。更にいろんなものが漂っている。こんなところに長く居てはならない。そう思いただひたすら真っ直ぐに進む。すると遠くに人影が見えた。シルエットだが帽子をかぶっているように見える。あの帽子のシルエットはもしかして…高まる心臓の鼓動。恐る恐るゆっくり近づいた。向こうの人影はこっちへ向かって来ている。人影がかなり近づいてきたところで私は衝撃を受けた。

「嘘…なんでこんなところに…」

「メリーーーーーー!!!!!!」

「蓮子!!!!!!」

私たちは抱き合い、二人揃って言った。

『どこいったの!何も言わずにいなくならないで!』

(後書き)

いい秘封の日と聞いて!!
タイトルがまんまだけどいいよね
(え

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4706y/>

いい秘封の日と聞いて

2011年11月13日01時15分発行